

脩子内親王の文化圏：
『枕草子』の善本所蔵に関連して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード: 作成者: 高橋, 由記 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5657

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



脩子内親王の文化圏

——『枕草子』の善本所蔵に関連して——

高 橋 由 記

はじめに

伝能因所持本『枕草子』（以下、能因本^①）の奥書に次のようなくだりがある。

枕草子は、人ごとに持たれども、まことによき本は世にありがたき物なり。これもさまざまではなけれど、能因が本と聞けば、むげにはあらじと思ひて、書き写してさぶらふぞ。草子ながらも手がらもわろけれど、これはいたく人などに貸さでおかれさぶらふべし。なべておほかる中に、なのめなれど、なほこの本もいと心よくもおぼえさぶらはず。さき

の一条院の一品の宮の本とて見しこそ、めでたかりしか、と本に見えたり。（469ページ）

ここには二種類の『枕草子』が記される。一本は、能因本の名の由来にもなった能因が所持していたという本で、奥書によると「草子ながらも手がらもわろけれど」と、草子の様子も筆跡も良いものではなかった。そしてもう一本が前一条院一品宮が所持していたという本である。これは「めでたかりしか」とあり、すばらしいものだったらしいが、残念なことに早くに散佚してしまった。

念のために確認しておく、能因法師（橘永愷）は平安中期の歌人で、清少納言とは血縁ではないものの姻戚関係にある（清少納言の夫橘則光の男則長（母は清少納言か）と、能因の姉妹との間に則季という男がいる）。清少納言とも無縁ではなく、なおかつ歌人としても著名な能因が所持していたならば良い本ではないかと期待するのも当然だが、「なほこの本もいと心よくもおぼえさぶらはず」と、期待通りではなかったという。それに対し、「まことによき本は世にありがたき」という『枕草子』の中で、すばらしかったというのが、伝前一条院一品宮所持本である。

前一条院一品宮とは、一条天皇第一皇女脩子内親王（母は中宮定子）を指す。清少納言が仕えた中宮定子所生の皇女だから、そこに善本といえる『枕草子』が所蔵されていたというのは頷ける。しかし、文学作品の所蔵者として、脩子内親王の名があがる意義はそれに留まるものではないだろう。脩子内親王は、父帝鍾愛の第一皇女として一条朝において重く扱われたのもちろんのこと、後一条朝においても、天皇の唯一の姉として丁重な扱いを受けており、また養子とした延子が入内した後朱雀朝においては、延子の養母として参内し、異母弟後朱雀天皇と対面したという。ここでは主人（キサキ・齋院・内親王など）とそこに集う人たち（女房など）による文化的・文学的営為とその活動の場を「文化圏」³と呼ぶことにするが、小論は脩子内親王の文化圏を探り、脩子内親王が『枕草子』の善本を所持していたことの意味を再考することを目的とする。なお、脩子内親王については近藤（満田）みゆき氏のご論⁴があり、多くの示唆を受けた。

一 生涯

脩子内親王（長徳二年（九九六）～永承四年（一〇四九）、五十四歳）は一条天皇第一皇女（母は中宮定子）である。同母弟妹に式部卿敦康親王と媛子内親王、異母弟に後一条天皇と後朱雀天皇がいる。長徳三年（九九七）二歳で内親王となり、寛弘二年（一〇〇五）十歳で着裳・叙三品、翌三年に二品、さらに翌四年（一〇〇七）十二歳で一品に叙され、准

三宮となった。第一内親王が、他の内親王に比して特別な扱いを受けたことは一文字昭子氏のご論文に詳しい⁵⁾。脩子内親王は中宮所生の第一内親王であり、なおかつ一品であった。従来、一品親王・内親王は少なく、安田政彦氏によると、大宝令施行以降後冷泉朝までの約三百六十年間に在世した皇子女（親王一・二・四人、内親王一・五〇人）のうち、一品に至ったのは親王十二人、内親王九人という⁶⁾。脩子内親王は父一条天皇鍾愛の内親王として、幼くして非常に高い品位を与えられた。

以下、脩子内親王に関する略年表である。

和暦（西暦）	年齢	天皇	事項
長徳二年（九九六）	1歳	一条	誕生
長徳三年（九九七）	2歳		内親王宣下
長徳四年（九九八）	3歳		着袴
長保元年（九九九）	4歳		同母弟敦康親王誕生
長保二年（一〇〇〇）	5歳		同母妹嬬子内親王誕生
長保四年（一〇〇二）	7歳		▼母皇后定子薨（24歳） ▼叔母藤原道隆四女（御匣殿）没 ▼叔母藤原原子（東宮妃）没
寛弘二年（一〇〇五）	10歳		着裳。同日、叙三品
寛弘三年（一〇〇六）	11歳		叙二品
寛弘四年（一〇〇七）	12歳		叙一品。同日、年官年爵。准三宮。本封の外、加千戸
寛弘五年（一〇〇八）	13歳		▼同母妹嬬子内親王薨（9歳）
寛弘六年（一〇〇九）	14歳		異母弟敦成親王（のちの後一条天皇。母中宮彰子）誕生
寛弘七年（一〇一〇）	15歳		異母弟敦良親王（のちの後朱雀天皇。母中宮彰子）誕生
寛弘八年（一〇一一）	16歳	一条 三条	▼伯父藤原伊周没（37歳） ▼父一条天皇崩（32歳） 叔父藤原隆家の邸に移御《道長不快》

長和二年（一〇一三）	18歳		三条宮に移御《故一条天皇の旧臣、参仕》
長和四年（一〇一五）	20歳		▼叔父隆円没（36歳）
長和五年（一〇一六）	21歳	三条	
寛仁二年（一〇一八）	23歳	後一条	異母弟後一条天皇即位
寛仁四年（一〇二〇）	25歳		▼同母弟敦康親王薨（20歳）
万寿元年（一〇二四）	29歳		藤原頼宗女延子（5歳）を養子にする
長元九年（一〇三六）	41歳	後一条 後朱雀	出家 ▼異母弟後一条天皇崩（29歳） 異母弟後朱雀天皇即位
長久元年（一〇四〇）	45歳		〔正月五日庚申〕一品宮脩子内親王歌合
長久二年（一〇四一）	46歳		夏一品宮脩子内親王歌合
長久三年（一〇四二）	47歳		養子藤原延子（27歳）、入内
寛徳元年（一〇四四）	49歳		▼叔父藤原隆家没（66歳）
寛徳二年（一〇四五）	50歳	後朱雀 後冷泉	▼異母弟後朱雀天皇崩（37歳） 甥後冷泉天皇即位
永承四年（一〇四九）	54歳		養子延子、正子内親王を産む ▼薨

年表中で「▼」を付したのは、脩子内親王の近親者の死に関わる事項だが、親弟妹・伯叔父・叔母と、非常に多くの人に先立たれたことが判る。中でも父母・同母弟妹といった、いわゆる肉親を比較的早くに亡くしている。『栄花物語』において脩子内親王はそれほど描写が多い人物ではないが、正編では誕生が記される巻五「浦々の別」の他は、母定子の死（巻七「とりべ野」）、同母妹嬬子内親王の死および伯父伊周の死（巻八「はつはな」）、父一条天皇の死（巻九「いはかげ」）、叔父隆円の死（巻十二「たまのむらぎく」）、そして同母弟敦康親王の死（巻十四「あさみどり」）と、近親者の死に関連して描かれることが多い。

さて、内親王の後見は母方の親族が担うのが一般的だから、脩子内親王は幼くして後見を失い、その後は道長・彰子の

庇護を受けることになった。しかし、脩子内親王はそれを潔しとしなかったとされる。⁽⁷⁾父一条院の正日法要の後、十六歳の脩子内親王は突如として叔父隆家の邸に移った。『小右記』寛弘八年（一〇二二）八月十一日条には次のようである。⁽⁸⁾

今夜一品親王從院渡給中納言隆家云々、但男一品宮不遷給云々、一品宮令他処之事、左府気色不快云々、忽渡他所給有事故云々、藤中納言密語耳、

脩子内親王の移御に対して道長は「不快」であったという。下玉利百合子氏は「ここに至って、彼女は、よる辺ない弟宮の傍去らず後見るべき「姉の責務」よりも、断乎、「第一皇女の自恃」を選択したのである。そして、この折を境に、姉弟は、終生居をとにもすることは叶わなかった」とする。彰子の猶子であった敦康親王が、敦成・敦良親王誕生後に「使い捨て」状態であったことは下玉利氏のご論に詳しいが、脩子内親王はそうした道長・彰子に抗議したといえよう。近藤みゆき氏は「この遷御を決定的な機会として、脩子は実質的な後見を隆家に委ねる事になったらしい」とし、「父帝崩御後の脩子の周辺には、頼通に婿取られるなど終始道長庇護下に置かれた敦康とは対象的に、隆家とその一族をはじめ中閥白家の身内が親昵するような人的環境が想定される」とする。脩子内親王は父一条天皇に鍾愛されて社会的に重く遇され、また中宮定子の血を引く第一皇女としての自覚と誇りを強く持っていたといえる。

二 三条朝・後一条朝

三条朝の脩子内親王の事蹟として、特筆すべきは三条宮に移御したことだろう。『小右記』長和二年（一〇一三）正月二十八日条には次のようである。

資平云、昨日（戊剋）、一品宮（故院女一）、遷給三条宮、御車用金作檳榔毛、從車有数、大納言道綱、中納言俊賢・頼通、参一（議）経房・兼隆・正光・実成・道方・頼定等祇候、故院旧臣拳首参仕、但殿上人依甚雨不騎馬云々、隆

家卿於廉中行事、上達部已上饗饌、亦有基手紙者、

雨の中、脩子内親王（十八歳）の移御に大納言道綱以下の上達部九人と殿上人が従ったことが記される。死から一年半を経てなお、これだけ多くの上達部を動かす一条天皇の徳の高さとともに、一条天皇が生前いかに脩子内親王を鍾愛したのが知られる。なお、この三条宮に脩子内親王は終生在することになる⁹⁾。

三条朝を経て、長和五年（一〇一六）に異母弟敦成親王（後一条天皇）が即位した。後一条朝の脩子内親王文化圏の有様を物語るものとして、『更級日記』¹⁰⁾をあげることができる。

いと暗くなりて三条の宮の西なる所に着きぬ。ひろびろとあれたる所の、過ぎ来つる山々にも劣らず、大きにおそろしげなるみやま木どものやうにて、都のうちとも見えぬ所のさまなり。ありもつかず、いみじうもの騒がしけれども、いつしかと思ひしことなれば、「物語もとめて見せよ、物語もとめて見せよ」と、母をせむれば、三条の宮に、親族なる人の、衛門の命婦とてさぶらひける、尋ねて、文遣りたれば、めづらしがりてよろこびて、御前のおろしたる とて、わざとめでたき冊子ども、硯の筥の蓋に入れておこせたり。うれしくいみじくて、夜昼これを見るよりうちはじめ、またまたも見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに、たれかは物語もとめ見する人のあらむ。（294ページ）孝標女が帰京した寛仁四年（一〇二〇）のことで、脩子内親王は当時二十五歳である。物語をせがむ孝標女の願いを叶えるため、母は伝手を頼った。それが脩子内親王に仕える衛門命婦だが、衛門命婦は「御前のおろしたる」つまり、脩子内親王下賜の物語類を贈ってくれた。「一条院よろづにし奉らせ給へりし何の御調度」（『栄花物語』巻二十一「後くゐの大將」、143ページ）¹¹⁾と、一条天皇は脩子内親王のために様々な調度を用意したというが、調度類だけではなくかなり質と量を誇る物語類も脩子内親王のもとにあったと考えて良い。すでに父母・同母弟妹は亡いが、後一条朝における脩子内親王は、異腹とはいえ天皇の唯一の姉である。当時、一品であった内親王は脩子内親王だけであり、後一条朝の脩子内親王も、確固たる存在感を有していた。

またこの年、脩子内親王はイトコにあたる伊周女を母とする頼宗女延子を養子とした。⁽¹²⁾『栄花物語』には「宮は、春宮大夫殿（＝頼宗）、中姫君（＝延子）、まだ稚くおはせし折より、とりはなち養ひ奉らせ給ける」（巻二十一「後くゐの大將」、143ページ）と脩子内親王の出家と併せて記されるが、『小右記』寛仁四年（二〇二〇）十一月二十五日条には「民部大輔（源）方理来伝一品宮（脩子内親王）御消息云、（中略）或云、以左衛門督頼宗女（藤原延子）為彼宮養子被着袴云々」とあり、実資に対し二十七日に予定されている延子の着袴の儀への出席要請があった。倉田実氏は「着袴以前に養女の話が起り、着袴で正式の養女となったことを示している」とする。頼宗は道長男とはいえ明子所生のため、倫子所生の頼通・教通に比して官位は劣っており、娘を一品宮の養子とすることの意義は大きかったと思われる。

その四年後の万寿元年（二〇二四）、脩子内親王は二十九歳のときに出家した。『栄花物語』巻二十一「後くゐの大將」には

この宮の内は更なり、大宮（＝彰子）・内・東宮まで聞しめして、あはれにおぼしめしきこえさせ給。さるはこの正月に、大宮の京極殿におはしまし、に行幸ありしに、宮もそこに渡らせ給て、御対面ありしに、いみじうあはれに物をおぼし知る様の御物語などありて、今よりは内におはしますべく聞えさせ給て、年頃のおぼつかなさを悔しう思ひきこえさせ給に、かゝる御事を聞しめして、あはれに口惜しうおぼしめす。（142ページ）

とあり、正月に後一条天皇と脩子内親王が久しぶりに対面し、天皇は「年頃のおぼつかなさを悔しう思ひきこえさせ給」で、脩子内親王に内裏住みを勧めた矢先のことだったと記す。出家に関しては、「大宮よりも殿（＝道長）よりも、御さうぞく奉らせ給」（同、143ページ）という。寛弘八年（二〇一一）に脩子内親王が隆家邸に移御した際に道長は不快だったというが、寛仁四年（二〇二〇）の延子の着袴にはその祖父道長の口入があったか実資は記しているから（『小右記』十一月二十七日条）、両者は決して没交渉ではなく、脩子内親王出家の際に道長が物質的援助をしたとしても不思議ではない。

さて、延子の入内の噂は、『栄花物語』続篇に記されることになる。

〔頼宗ノ〕中姫君（＝延子）は前一品の宮に、一所つれぐにておはしませば、迎へ奉らせ給て、いみじくかしづき奉らせ給て、それも内にとおぼしめしたれど、内大臣殿の御事（＝教通女生子ノ入内）だにかく難ければ、いかでかおぼし寄らん。一品宮は一条院の皇后宮の御腹におはしませば、内の御妹におはします。御文通ひ、女房なども参り通ひて、院（＝上東門院）に行幸あるにも渡りあはせ給て御対面などありけり。春宮大夫殿の上（＝頼宗室）は、帥殿（＝伊周）、姫君にもものし給へば、一品宮には離れさせ給はぬ御中にて、姫君をも御子にし奉り給へるなるべし。三条宮におはします。御手めでたくか、せ給。琴・琵琶弾く人々候ひて、いとをかく弾き合せ遊ばせ給。この姫君も、箏の琴いとおかく弾かせ給。御かたちもいとあてにおかしげにもものし給ふ。（卷三十一「殿上の花見」、344ページ）

天皇と出家後の脩子内親王は「御文通ひ、女房なども参り通ひて」と良好な関係であつたという。脩子内親王は「御才などはいみじかりし御筋にておはしませばにや」（卷二十一「後くゐの大将」、141ページ）と、中宮定子の血を引いて才長けた人物であつたというが、さらに「御手めでたくか、せ給」と手跡も素晴らしく、また出家後であるにもかかわらず、「琴・琵琶弾く人々候ひて、いとをかく弾き合せ遊ばせ給」と楽才すぐれた人々が集つて、在所は華やいでいたようである。養子とした延子は「御かたちもいとあてにおかしげ」で、「箏の琴いとおかく弾かせ給」という。脩子内親王にしても、延子の将来に期待を掛けたところはあつたであらう。

三 後朱雀朝

出家したとはいえ、脩子内親王は決して仏道三昧の生活を送つていたのではなく、後朱雀朝では二度の歌合を催したら

しい。¹³⁾長久元年（一〇四〇）〔正月五日庚申〕一品宮脩子内親王歌合〔歌合大成番号二二六〕と、「長久二年」夏一品宮脩子内親王歌合〔同一三二〕である。まとまった形では残っておらず、諸歌集に歌が残っているだけだが、出家してもなお、文化・文学的活動に積極的な脩子内親王の姿をみる事ができる。

長久元年（一〇四〇）〔正月五日庚申〕一品宮脩子内親王歌合〔同一二六〕は『夫木抄』（八二九一番歌）に詠み人知らずの歌が一首残るだけで、なおかつ「曆（ママ）。「天曆」トスル本モアリ）四年正月庚申一品宮歌合」とある詞書では「一品宮」が脩子内親王とはいえない。しかし、萩谷朴氏は『和歌合抄目録』に長曆四年（＝長久元年）の「一条院入道一品宮歌合」の記録のあることや、天曆四年（九五〇）では相応しい内親王がいないこと、さらに『夫木抄』所収の歌が、『和歌合抄目録』にある「題古歌合」と合うことから「天曆四年とは長曆四年の謬伝ではないかと考える」とする。「古歌合」は天曆二年（九四八）の「天曆二年九月十五日庚申陽成院一宮姫君歌合」〔同四二〕を意識して先蹤としたものという。脩子内親王の叔父隆家（六十二歳）は前中納言ではあるものの、大宰権帥として経済的には安定していたと思われるから、一品宮の後見として問題はないであろう。また延子の実父頼宗は、のちの後冷泉朝歌壇においては指導的役割を果たすほどの歌人でもあるから、頼宗の後援もあったかもしれない。

さらに翌長久二年（一〇四一）にも脩子内親王は歌合を催している。「長久二年」夏一品宮脩子内親王歌合〔同一三一〕で、『千載集』（二七一番歌）、『万代集』（五八九・二四四六番歌）、『夫木抄』（三四五三・一一三八一番歌）に、枇杷殿皇太后宮五節（五節）・小命婦・加賀左衛門・相模の歌が残っている。『和歌合抄目録』によると、題は五題で十番の歌合であった。萩谷朴氏は「この五首〔筆者注『千載集』以下ノ五首〕が、全て一度の歌合に収まるものであるか否かは容易に決し難いが、これら五首の歌に見られる菖蒲・花橘・郭公・瞿麦・夏恋の五題は、たまたま和歌合抄目録に題五首とある数と合致するのみならず、全てが夏題として纏って居り、かつ、各題の歌題としての比重がよく釣合っている」とし、同一歌合における歌としている。出詠歌人の枇杷皇太后宮五節は妍子の女房だったが、妍子没（万寿四年（一〇二

七) 後、長元五年(一〇三三) 上東門院彰子菊合(同一二二)に出詠しており、彰子女房になったかともされる。菘谷氏は『秦箏相承血脈』にみえる五節命婦(嵯峨命婦)と同一人の可能性も指摘しているが、五節命婦は『秦箏相承血脈』に「麗景殿女御女房」、つまり延子の女房とあるから、脩子内親王との関連でいえば、脩子内親王の歌合に出詠した五節は五節命婦と同一人とみるのは、いかにも相応しい。また、他の出詠者のうち、加賀左衛門と相模は脩子内親王女房で、それぞれ既に歌合に出詠経験のある歌人である。小命婦は他文献には見えないが、脩子内親王女房であろうか。菘谷氏が「当代の錚錚たる女流歌人をつどえての純粹歌合ではあり、個々の歌品も低からず、御年配の内親王を中心に、心をこめて詠進したさまも想像せられる」と評するように、私的で小規模な歌合ながらも名の知られた女流歌人を集めての催しであったと考えられる。出家後の女主人が歌合を催すことは、たとえば上東門院彰子菊合があり、皆無とはいえないが、出家した内親王主催の歌合は前例がみあたらない。また、母后として隠然とした勢力を有する上東門院彰子と脩子内親王とは単純に比較することは出来ない。歌合主催は、脩子内親王の文学的活動への強い関心のあらわれといえよう。

四 延子の入内

さて、延子の入内は後一条朝でも噂されていたが、実際の入内は後朱雀朝の長久三年(一〇四二)である。

入道一品宮、春宮大夫殿、姫君参らせ奉らんと申させ給て、参らせ奉らせ給。一品宮も入らせ給て、御対面などありけり。三日ばかりありて宮は出でさせ給ぬ。大夫殿これもつと候ひ給。(卷三十四「暮まつほし」、414ページ)

後朱雀天皇には、東宮時に尚侍嬉子(道長女)が入侍し、親仁親王(のちの後冷泉天皇)を産んで没しており、その後、禎子内親王(三条天皇皇女)が入侍、良子・娟子内親王と尊仁親王(のちの後三条天皇)を産んでいる。即位後は関白頼通養女の娘が入内・立后し、祐子・禊子内親王を産んで没しており、その後、内大臣教通女の生子が入内しているか

ら、延子は五人目のキサキである。他の四人に比すと、権大納言を実父に持つ延子は家格ではもつとも劣るが、それを埋めるのが、一品宮養子という出自の格上げであろう。天皇の唯一の姉で、格式高い一品宮である脩子内親王は養母として延子の入内に付き添い、天皇と対面している。

また『栄花物語』によると、延子の直廬は麗景殿で、東宮妃章子内親王の直廬だった宣耀殿とは近く、「宣耀殿、麗景殿いと近き程にて、加賀左衛門、出羽弁などいひ交す」(同、414ページ)と、延子女房の加賀左衛門と章子内親王女房の出羽弁は親しく贈答していたという。この加賀左衛門は、さきの脩子内親王歌合に出詠した女房で、延子入内に際して、延子女房として宮中に入ったのだろう。『袋草紙』によると、延子の父頼宗は、永承五年(一一〇五〇)の「祐子内親王歌合」(同一四二)への加賀左衛門の出詠を強く推挙したというから、延子女房の中では歌人として優れていたと思われる。実際、『後拾遺集』以下の勅撰集にも入集している。有能な女房を抱えることは、後宮生活の必須条件のひとつだから、歌才ある加賀左衛門の存在は、入内した延子を支えることになったろう。延子は後朱雀天皇の皇子を産むことはなかったものの、寛徳二年(一一〇四五)に正子内親王を産んだ。そして脩子内親王没後の永承五年(一一〇五〇)には「前麗景殿女御延子歌絵合」(同一三九)〔「正子内親王絵合」とも称される〕を催している(歌人は、相模・伊勢大輔・加賀左衛門)。萩谷氏は「頼宗が女御や内親王の徒然をお慰めする為に催したものであったと考えられる」とするが、出詠歌人や歌合を催すこと自体に、養母であった脩子内親王の薫陶が活かしているのではなからうか。

五 脩子内親王の文化圏と女房

魅力ある文化圏に欠かせないのが魅力ある女房である。延子女房となった加賀左衛門も歌才が優れていたのだろうが、脩子内親王の女房として最も有名なのは歌人相模である。相模はかつては「乙侍従」の名で中宮妍子に仕えていたが、夫

大江公資とともに相模に下り、その任果てて万寿二年（一〇二五）に帰京して後、脩子内親王に仕えたという。長元八年（一〇三五）の「関白左大臣頼通歌合」（同一二三）（高陽院水閣歌合とも）以下の歌合に多数詠進し、和歌六人党の指導的存在となるなど、後朱雀朝・後冷泉朝における、最も有名かつ重要な女流歌人の一人である。『後拾遺集』以下の勅撰集に四十首も入集し、『百人一首』にも採られている。歌人相模が女房として仕えていることは、脩子内親王文化圏を魅力あるものにしたと思われる。たとえば『経信集』Ⅲには、¹⁵経信が脩子内親王のもとを訪れたときの、相模とのやりとりが残る。

十月ばかりに、入道一品宮に参りたりしに、相模が急ぎ出で、会ひて、「異人となむ思ひつるに」と言ひしかば、「心なく参りにけるかな」と言ひしほどに、月いと明かりしに、時雨のせしを見て

月ふり隠す雨に音して（一五二）

と言ひしかば、

相模

唐衣袖こそ濡るれ秋の夜は

源経信は歌人としても有名で、その経信の下句に即座に上句を付けることの出来る女房としての相模の存在は貴重である。また、次の『後拾遺集』の相模の歌なども、脩子内親王文化圏あるいは相模を考える上で重要であろう。

入道一品宮に人々参りて遊び侍りけるに、式部卿敦貞親王、笛などをかしく吹き侍りければ、かの親王のもとに侍りける人のもとに、又の日、昨夜の笛のをかしかりし由、言ひにつかはしたりけるを、親王、伝へ聞きて、

「思ふことの通ふにや。人しもこそあれ。聞き咎めける」など侍りける返事に 相模

いつかまたこちくなるべき鶯のさへづり添へし夜半の笛たけ（卷一九・雑五・一一五〇）

脩子内親王の許に集う人々の中には、敦貞親王（小一条院第一皇子）も含まれていた。「式部卿」とあるのは極官だろうから、当該歌の詠歌年時における敦貞親王の官職は不明だが、皇親である親王が訪れる女流の文化圏はそれほど多くはな

いである¹⁶。敦貞親王は笛を「をかしう」吹いたという。その笛の音を相模は聞き留め、親王のもとにいる知人にその旨を伝えたところ、親王からも返事が来たという。歌人相模だからこそ、親王も返事を寄越したのかもしれない。相模の最初の出仕先と考えられるのは中宮妍子（三条天皇中宮）で、道長女としての権勢を誇り、ましてや妍子の派手好きは有名だったから、その華やかさに比したとき、一品とはいえ出家後の脩子内親王の三条宮はいかにも地味である。また、近藤みゆき氏が「脩子家の女房とは等し並みに括れるものではなく、延子に出仕の体を取る者と文字通りの脩子家女房とに二大別されるようなのだが」として、前者に加賀左衛門、後者に相模を想定しているように、相模は延子入内に際しても延子女房とはならなかったようである。しかし、四十歳過ぎて出詠した長元八年（一一〇三五）の「関白左大臣頼通歌合」（高陽院水閣歌合）で高い評価を得て宮廷歌壇に登場した相模にしてみれば、文化的・文学的活動に深い造詣を持つ脩子内親王のもとでの女房生活も、相応に充実していたのではなからうか。なお、相模は「前麗景殿女御延子歌絵合」に出詠しているから、脩子内親王没後の出仕先は不明ながら、延子とも関わりがあったことは確かである。

その他、脩子内親王のもとには陸奥という女房もいた。『後拾遺集』には次のようにある。

入道一品宮に侍りける陸奥がもにつかはしける 源頼綱朝臣

奥山の真木の葉しのぎ降る雪のいつとくべしと見えぬ君かな（卷一一・恋一・六三六）

陸奥については、高野瀬恵子氏のご論考¹⁷に詳しい。歌人藤原実方の孫にあたり、薫物の調合にすぐれた女房であったという。姪には歌人肥後がおり、その他にも一族には歌人が複数いた。陸奥に恋歌を贈った源頼綱は、兄に和歌六人党の頼実がおり、歌合にも出詠した人物で、そうした頼綱に恋歌を贈られたのが陸奥である。

さらに、『続詞花集』にも脩子内親王女房がみえる。

入道一品宮なる女の、五節の童にて侍りけるを見て、後につかはしける

平経章朝臣

雲の上に日かげかざししかひもなく山ゐるの氷とけで止みにし（巻一・恋上・五二二）

返し

女

ゆきずりに山ゐるの氷とけたらばかはす日かげもまばゆからまし（同・五二二）

五節の童は五節の舞姫に付き従う童女だから、「入道一品宮なる女」という詞書や恋歌の贈答をみると、「五節の童」には疑問も残るが、平経章は『後拾遺集』に二首みえる歌人である。この女房の名は伝わらないが、陸奥にしろこの女房にしろ、脩子内親王のところには源頼綱や平経章など、それなりの歌人に恋歌を贈られ、そしてその贈答が勅撰集・私撰集に入るほどの女房が複数いた。

さらに、脩子内親王の文化圏を考える上で重要と思われるのが、次の『四条宮下野集』である。

津の守師家、入道一品宮の書かせ給へる万葉集の抄を得させ給ふとて、「これは我がいみじき物と思ふ物なり。形見にせよ」などありしを、亡くなりて、この冊子を見るにあはれなり

猶ざりに契と思ひし古のあとぞまことに形見なりける（一五四）

藤原師家は脩子内親王が書いた『万葉集』の抄出本を所持し、それを自分の形見にして欲しいと下野に与えていたという。師家は、脩子内親王の叔父隆家の孫だから、その縁で脩子内親王の『万葉集』の抄が師家に伝わったのだろうが、脩子内親王が『万葉集』を書いたというのは、興味深い。『万葉集』を分類再編し、かつ訓みを付した『類聚古集』の存在が平安後期には知られるが、この『万葉集』の抄も、女性である脩子内親王蔵本だから訓みを付したものである。脩子内親王は『栄花物語』によると「御手めでたくか、せ給」（前掲）と筆跡に優れており、なおかつ高貴な一品内親王自らが書き写した『万葉集』ならばもちろん貴重な品である。しかし、これまでみてきた脩子内親王の文化的・文学的活動への関わりを考慮すれば、それが脩子内親王に関わるものであるからこそその価値・信頼があったと考えることが出来る。脩子内親王は積極的に文学作品を書写・収集していた。頼通による大規模な歌集収集はよく知られているが、脩子内親王

のもとにも相当数の物語類・歌集が集められていたと考えられる。

脩子内親王は永承四年（一〇四九）二月七日に五十四歳で薨じた。『後拾遺集』にはその死を悼む女房小侍従命婦と相模の贈答が残っている。

入道一品宮隠れ給ひて葬送の供にまかりて、またの日、相模がももにつかはしける

小侍従命婦

晴れずこそ悲しかりけれ鳥辺山立ちかへりつる今朝の霞は（巻一〇・哀傷・五四五）

二月十五日のことにやありけん。かの宮の葬送の後、相模がももにつかはしける

古の薪も今日の君が世もつき果てぬるを見るぞ悲しき（同・五四六）

返し

相模

時しもあれ春の半ばにあやまたぬ夜半の煙は疑ひもなし（同・五四七）

葬送の日は二月十五日（釈迦入滅の日）で、相模は脩子内親王の仏縁は「疑ひもなし」と詠んでいる。

おわりに

脩子内親王は中宮定子所生の一条天皇第一皇女であり、一品宮である。しかし、女性の多くがそうであるように、特別多くの資料が残っているわけではない。限られた資料からみる脩子内親王は、歌人相模・加賀左衛門らを女房に抱え、出家後であるにも拘わらず歌合を催し、人々が集う華やかな文化圏を築いていた。中でも、能因本奥書・『更級日記』・『四条宮下野集』に記された良質の物語類・歌集類の収集あるいは書写は、脩子内親王が文学に深い造詣を持っていたことを物語る。母中宮定子・父一条天皇、同母弟妹の敦康親王・姝子内親王が早くに亡くなり、それだけではなく母方の親族

(中関白家)の多くが早世してしまつた中で、定子の血を引く人物としての誇りを持つて、後一条朝・後朱雀朝に確固とした存在感を有したのが脩子内親王であり、またその文化圏だったのではなからうか。

そうした脩子内親王文化圏の様を考えたとき、能因本の奥書に「さき的一条院の一品の宮の本とて見しこそ、めでたかりしか」と記された『枕草子』が脩子内親王のもとにあったことの意味するところは、脩子内親王が、清少納言の主である定子所生の皇女ということに留まるものではない。脩子内親王は積極的に文化的・文学的活動をしており、その中に多くの優れた物語・歌集の書写・収集という行為があつた。『枕草子』の善本所蔵もその一端と捕らえることが出来る。たしかに、定子所生の皇女脩子内親王に『枕草子』が伝わるのも道理だが、そのみならず、文化的・文学的活動を行った脩子内親王所蔵だからこそその価値・意義があつた、ととらえる方が、より正しい理解だと考える。

注

- (1) 能因本『枕草子』の本文は、松尾聡・永井和子氏 校注・訳『日本古典文学全集 枕草子』(小学館 一九七四・四)による。算用数字はページ数。傍線筆者。以下同。
- (2) 皇后・女御など、天皇あるいは東宮の妻の意で「キサキ」の語を使い、立后したキサキの意の「后」と使い分けることにする。
- (3) 小論で用いる「文化圏」は、「サロン」と呼ばれることもあり、また、キサキなどとその女房たち(のまとまり)を示す意の「後宮」とは重なるところが多い。たとえば、「定子文化圏」と「定子後宮」はほぼ同義の場合もあるが、内親王や斎院など、キサキ以外を中心とするまとまりも考察対象とするため、「文化圏」の語を用いることにする。
- (4) 近藤(満田)みゆき氏「相模伝試論——中期以後の軌跡——」(『古典和歌論叢』明治書院 一九八八・四 所収、のち『古代後期和歌文学の研究』風間書房に収録)。以下、近藤氏の「論」はこれによる。
- (5) 一文字昭子氏「平安時代の女一宮——史実と物語(『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』)から——」(『国文目白』三七、一九九八・二)
- (6) 安田政彦氏「一品親王」(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八・七 所収)

- (7) 下玉利百合子氏「試論 枕草子の周辺をめぐる——第一皇子敦康親王(下)——」(『平安文学研究』七五 一九八六・六、のち「枕草子周辺論 続篇」笠間書院に収録)。同様の指摘は、『平安時代史事典』(角川書店、一九九四・四)「脩子内親王」の項目(福岡昭次氏担当)などにも見える。
- (8) 『小右記』の本文は『大日本古記録』(岩波書店 一九八七・一)による。へゝ内は小字。
- (9) 三条宮は、のち、脩子内親王の養子となった延子所生の正子内親王の所領となった。『中右記』承德二年(一〇九八)二月二十日条に「未時許当西北有焼亡、(中略)不論大小皆為燬燼、前齋院(後朱雀院女也、正子)、三条坊門万利小路家焼了。件所本是故人道一品家、齋院伝領給也」とある。なお、『中右記』の本文は『増補史料大成(普及版)』(臨川書店 二〇〇一・八)による。へゝ内は割注。
- (10) 『更級日記』の本文は犬養廉氏校注・訳『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館 一九九四・九 所収)による。
- (11) 『栄花物語』の本文は、松村博司・山中裕氏校注『日本古典文学大系 栄花物語』下(岩波書店 一九六五・一〇)による。人物に注を付したところもある。
- (12) 脩子内親王と養子延子については、倉田実氏「入内した養女たち——後朱雀朝の後宮——」(『王朝撰関期の養女たち』翰林書房 二〇〇四・一一 所収)に詳しい。以下、倉田氏のご論はこれによる。
- (13) 歌合については、萩谷朴氏『平安朝歌合大成 増補新訂』(同朋舎出版、一九九五・一一)によった。
- (14) 植村真知子氏は、加賀左衛門は「脩子内親王の所に仕えていたにはちがいがいないが、どちらかといえば延子の方に近く仕えていた」とする(「加賀左衛門考」、『古典と民俗』一、一九七五・一一)。
- (15) 以下、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』(角川書店 一九八三・二、一九八四・三)、私家集は『新編私家集大成』(CD-ROM版 エムワイ企画 二〇〇八・一二)による。表記は私に改めたところもある。
- (16) 近藤みゆき氏は、「脩子の周辺には(中略)隆家とその一族をはじめ中閨白家の身内が親昵するような人的環境が想定される」として、敦貞親王も隆家・脩子内親王に近かったのではないかと、とする。
- (17) 高野瀬恵子氏「『後拾遺和歌集』の女房陸奥をめぐる」(『瞿麦』二二二、二〇〇七・一〇)